CS NIPPON　2021年（令和3年）2月16日（火曜日）　【第3種郵便物認可】

共同中継輸送を開始

相模原―仙台 毎日運行　交代方式で負担減

左右に両社デザイン　専用車

萬運輸＆仙台配送

萬運輸（東海林憲彦社長、横浜市鶴見区）と仙台配送（尾上寿昭社長、仙台市宮城野区）は2月末をメドに、相模原―仙台で共同中継輸送を開始する。福島県白河市を中継拠点にドライバー交代方式で実施。両社のデザインを左右それぞれに描いた専用車両を毎日運行させる。3日、中継輸送に使用する専用車両の納車式を行った。将来的には中継ルート沿線の集荷も視野に入れる。（菊地将矢）

中継輸送では、主に自動車部品を運ぶ。積載効率を上げるため、スワップボディー車ではなく大型ウィング車を使用。2台の大型車が毎朝、相模原と仙台の拠点をそれぞれ出発。中継拠点でドライバーが乗り換え、萬運輸のドライバーは相模原、仙台配送のドライバーは仙台へ戻るため日帰りが可能となる。

車両は、ドライバーの労働環境に配慮し、最新の装備を備えた新車のウィング車を採用。進行方向の右側に萬運輸、左側に仙台配送のデザインを描いた「ハーフ＆ハーフ」の斬新なもので、中継輸送の特性を象徴している。デザインは東海林社長が発案。トラックのプリントは萬運輸の整備部門、ヨロズモータースの「オートボディプリンター」で施工した。

また、バックライトにLED（発光ダイオード）を採用して明るく見やすくしたほか、荷台のあおりに荷主から指定された安全のための6項目を掲載し、安全性向上にもつなげる。

東海林氏と尾上社長は10年以上の親交があり、信頼関係を築いてきた。東日本大震災の直後には両氏が被災地のボランティアを行ったこともある。両社では中継輸送実現に向けて協力体制を整え、ドライバーや管理者など数人で運行チームを構成。2024年4月からのドライバーの時間外労働上限規制へ対応するとともに、日帰り運行による負担軽減で、ドライバー不足解消と人材定着にもつなげたい考え。

中継輸送では、責任の所在や車両の使用条件など、両社で取り決めなければならない項目が多数あり、中小物流事業者にとってハードルが高い。一方、労働時間短縮や、車両稼働率向上による運行の収益性アップなどメリットも多い。

3日に萬運輸本社で行われた納車式で、東海林氏は「（ハーフ＆ハーフのデザインの）車両を運転するドライバーは、両社の看板を背負っている。無事故・無違反の中継輸送に力を入れていく」と強調。ウェブ会議システムで参加した尾上氏も「長距離輸送に比べ、ドライバーの身体的な負担が減る。社員思いの運行にしたい」と意欲を述べた。

今後、中継ルート沿いのエリアからの集荷なども検討していく。

「ハーフ＆ハーフ」の車両を背に萬運輸の東海林社長（右から4人目）ら